

## 「楽しさ」を中心とした大学体育授業の試みに関する基礎調査

○ 高橋 伸（国際基督教大学）

キーワード： 楽しさ、大学体育、生涯スポーツ、レジャー教育

### 1. はじめに

大学における教育改革の必要性が論じられている今日、大学体育授業の改革も当然のことながら、その在るべき姿を模索している。そこで問題となるのが、大学における体育の目標とそれを達成するための方法をいかに定めるかということになる。

各大学によって、その目的は決定されるべきものではあるが、従来までは運動、健康・体力づくり、スポーツ活動などの技術および方法の修得に力点が置かれていた傾向が見受けられる。換言すれば、高等学校までの体育の延長線上にあったといえよう。

しかしながら、時代の要請もあり、生涯スポーツの必要性が叫ばれている現代においては、運動や健康・体力づくりに関してはその習慣化、スポーツ活動についてはその生活化が、より重要な課題となってきた。したがって大学体育においては、卒業後社会人となつてから、個々人が大学体育で得られた経験を、いかに継続できるかにその目標を定める必要があると思われる。すなわちレジャー教育の一環として、その視点からの目標と方法を設定することが、課題解決への手掛かりと考えられる。

今回の報告は、以上の問題意識から「好きになる」と「楽しい」というキーワードに着目し、体育授業の中に、その要因をいかに取り入れていくかを検討しようとするものである。これらの心理要因は、多様かつ複雑な外発的動機と内発的動機によって形成され、両側面からのアプローチが必要となることはいうまでもない。しかしながら、その一端をも把握できるとすれば、運動の習慣化とスポーツの生活化への手掛かりが得られるものと思われ、今後の大学体育の在り方とその指導に貢献できると認識するものである。

### 2. 本報告の目的

本報告は、全体構想のもとに、その基礎的事実を把握しようとし、次の項目についての調査を実施し、その結果の概略を報告しようとするものである。

- 1) 体育・運動・スポーツ、および「走る」「泳ぐ」ことについて好き・楽しいの度合いを、受講前と受講後と比較する。
- 2) 楽しさを規定すると思われる個人の態度、運動への反応、目標、教師、成績、授業への評価を受講前と受講後と比較する。
- 3) 上記の項目の男女差の検討。

なおここでいう全体構想とは、基礎事実をもとに抽出された重要と思われる要因について、それを満たすべく計画された授業（実験群）とそれと対比できる授業（統制群）を実施して、当初の目的を達成しようとするものである。

### 3. 本報告の方法

- 1) 調査対象： 大学新入生（1年次）男子 46名 女子 131名 計 177名
- 2) 調査期日： 事前調査・・・1996年4月第2・3週（授業初日）  
事後調査・・・1996年6月第3週（授業最終日）

- 3) 調査場所： I 大学体育館
- 4) 授業設定： BASIC コースで、内容は長距離走および長距離泳（時間泳）、70分授業を8～10回実施。目標を「活動を楽しむ」に設定した。
- 4) 調査項目： ・体育・運動・スポーツなど好き・楽しい16項目5段階チェック  
・体育授業全般についての30項目5段階チェック
- 5) 分析方法： 5段階の分布割合と平均得点の比較検討

#### 4. 結果

##### 1) 好き・楽しい項目の事前・事後比較

事前における体育・運動・スポーツ・距離走・距離泳の好きの度合いは、一般に運動やスポーツについては約70%の支持率があるが、体育については44%～64%に止まる。また距離走・距離泳については約14%から37%の支持率となっている。事後の調査においては、すべての項目に支持率の向上がみられるが、とくに体育と距離泳では、平均スコアで0.5ポイント以上の上昇があった。

また上記の項目に対する楽しさの度合いは、事前で運動・スポーツに対して80%以上の支持があるが、体育は45%～55%に止まっていた。また距離走・距離泳については13%から27%であった。事後調査においては、楽しさの全般の度合いも向上をみせた。その中でも距離走・距離泳は、平均スコアで0.5ポイント以上の向上があった。

##### 2) 体育授業全般項目の事前・事後比較

授業への態度での事前・事後比較では、平均スコアで0.8ポイントの上昇をみた。運動への反応（体力や運動能力への自信）については、上昇はみられるものの有意差は認められなかった。教師への印象については、大幅な支持率を得た。授業目的や内容および成績の方法についての理解度は高くなっており、自身にとって有用であったとの支持回答は半数から2/3に上昇した。体育授業の支持率は約10%上がり、82%～88%となった。授業内容に不満を示した者は、男子で20%、女子で30%の減少となった。

##### 3) 男女差の検討

男子の標本数が46名と、女子の約1/3に止まっているため、男女の比較は必ずしも妥当とはいえない。したがって参考程度に止めることとするが、事前調査においては、顕著な差がみられないものの、多少の差がみられた項目は、態度、成績への関心であった。授業中男子は女子よりもリラックス傾向が強いことも認められた。女子は男子よりも苦痛に感じているようである。それぞれ平均スコアで0.4ポイントの開きがみられた。成績への関心は女子が高い傾向を示しているが、受講後の調査ではそれらの差が少なくなっている。この傾向は、他の項目についても認められることが分かった。

#### 5. 考察と今後の課題

今回の基礎調査で得られた結果は、いわば高校時代までに経験した体育イメージと特定の大学体育授業経験との対比と換言できる。全般的に受講前よりも受講後にプラス反応があったことは認められるが、それが果たして目標設定によるものか指導効果によるものかは断定できなかった。今後は、当初の構想に従って、今回得られた結果の中から判別できる事項を追求し、より精度の高い方法を開発したい。